

平成 26 年度における 学問基礎科目相関図の効果検証

齊 藤 和 也 (経済学部教授)

林 敏 浩 (総合情報センター教授)

佐 藤 慶 太 (大学教育開発センター准教授)

1. はじめに

調査研究部では、新入生が授業に対して幅広い関心を持ち、授業科目相互の関連性について意識を持った上で受講登録に臨むための手助けとして、「学問基礎科目相関図」を作成し、これを『平成 25 年度全学共通教育シラバス I』に掲載した。同部では、平成 25 年 11 月にアンケート調査を行い、相関図の効果に関する分析の結果を『香川大学教育研究』第 11 号に掲載した(齊藤ほか、2014)。分析の結果、相関図は学生が履修計画を立てる際の判断基準とはなっていないが、学問基礎科目相互の関連性を認識することや、授業相互の関連を意識することには役に立つ可能性が高いとの結論を得た。そして当面の課題として、相関図に対する学生の認知度を大きく高める必要があることは明らかであったので、その対策を実行した上で、相関図の効果について、次年度も同じ形式のアンケート調査を再度実施することにした。本論は、その調査結果を分析したものである。

2. 今回のアンケート調査のねらい

今回の調査のねらいは、第一に、全学部の学生から一定数のサンプルを得ることである。時間割の都合上、全学部について満遍なくサンプルを採ることが難しい状況にあるが、データの客観性を高めるために、できる限りサンプル数を増加させることに努めた。第二に、昨年度と同じ設問を設けることによって、相関図という観点から学生の受講態度の傾向を確かめることである。数年にわたり調査を継続させ、学生の受講態度の傾向を見極めつつ、カリキュラム等の改善に役立たせることがこのような調査を行う目的である。今回の調査では、特に、相関図の認知度の設問は、認知度アップの対策との関連を見極めるためにも重視したところである。第三に、昨年の分析で選択肢の改善が必要な設問がいくつかあったが、改善された設問により、学生の受講態度の傾向を明確に析出することである。設問の選択肢の改善により、後述のように、いくつかの点で傾向を明確に析出することが可能になり、次年度において行うべき課題も明らかになってきた。

3. 調査の概要

3-1. 実施方法と設問

調査対象は、平成26年10月28日（火）、11月4日（火）の2校時、10月30日（木）、11月6日（木）の5校時に、学問基礎科目、主題科目を受講している学生である。授業担当教員の協力を得て、授業時間内に調査票を配布し、回収を行った。有効回答者数は、1035名であった。次節で詳しく見ていくが、アンケートは、全学共通教育スタンダードおよび関連項目の認知度（問1～4）、全学共通科目相関図¹⁾の認知度（問5～7）、履修計画を立てる際の判断基準（問8～10）、授業相互の関連付け（問11）についての設問からなる。

3-2. 実施方法と設問²⁾

昨年度の実施を踏まえて、アンケート用紙、実施方法に変更を加えた。第一に、全学共通教育スタンダードおよび関連項目の認知度に関する設問と、相関図の認知度に関する設問の順番を入れ替えた。これは、一般的な問題に関わる設問から始めたほうが、回答しやすいという指摘を受けてのことである。第二に、学問基礎相互の関連の理解、各科目群の役割の理解についての設問を、3件法（「理解している」、「どちらともいえない」、「理解していない」）から4件法（「よく理解している」、「ある程度理解している」、「あまり理解していない」、「全く理解していない」）へと変更した。これは、昨年度、この設問において半数以上が「どちらとも言えない」の項目を選択しており、安易に選択された可能性が高いからである。第三に、昨年度は、全学共通科目が専門教育に役立っているかを問うたが、低学年に対する問いとして適切ではないという判断から、削除した。第四に、昨年度、問8（履修計画を立てる際に依拠する情報）、問11（授業を選択する際の決め手）において、「その他」を選択した回答者が自由記述欄に記入した内容を、選択肢として組み込んだ。

実施においては、回答者の学部間バランスを確保するために、調査の範囲を拡大した。昨年度は火曜日の2校時に授業を受けている学生を対象としたが、今年度は、それを、火曜日2校時、木曜日5校時に授業を受けている学生に拡大した。

3-3. 回答者の分布

表1は、回答者の学部別割合、学年別割合を示したものである。主たる調査対象は1年生であるので、収集できたアンケートデータは学年の観点から妥当な分布であるといえる。また、調査学生数も昨年度に比べて多い（昨年度の有効回答者数は819名）。

しかし、学部別に見た場合、農学部、医学部の学生が少ない（1年の各学部学生総数に対して、農学部55%、医学部26%）という結果になった。農学部は、火曜日に農学部キャンパス（三木町）で授業があるため、木曜日の調査でのみデータがとれたため、このような結果になったと考えられる。医学部は、火曜日に医学部キャンパス（三木町）で授業があるというわけではない。火曜日に幸町キャンパスの授業を入れないと、火曜日を授業のない日にすることができるため、このような結果が出たと考えることができる。農学部と医学部の調査学生数の問題を含め、学部別の調査学生のバランスを確保することは、今後に残された課題となった。

表 1 回答者の割合（計 1035 人、カッコ内は総学生数。一年生のみ提示）

	1 年	2 年	3 年	4 年	不明
教育学部	180 (209)	8	1	12	0
法学部	137 (160)	36	12	6	0
経済学部	232 (285)	9	6	5	0
医学部	44 (169)	1	0	0	0
工学部	230 (268)	8	5	4	0
農学部	86 (156)	2	2	1	0
科目等履修生	2	-	-	-	0
不明	0	0	0	0	6

回答の集計に際して、学部間比較も行ったが、質問項目のすべてに関して、詳細な分析を行っているわけではない。学部間の相違については、顕著な部分のみ言及し、詳細な検討については次年度以降の課題とする。

4. アンケート結果の分析

4-1. 全学共通教育スタンダード及び関連項目の認知度

最初の設問群は、平成 23 年度から適用されている「全学共通教育スタンダード」及び関連項目の認知度に関わるものである。問 1～問 3 では、「全学共通教育スタンダード」（問 1）、全学共通教育スタンダードに即して設定された「全学共通教育の到達基準」（問 2）、「全学共通教育水準コード」（問 3）について「知っているかどうか」を問うた。回答は「内容まで知っている」、「あることは知っている」、「全く知らない」の三択とした。

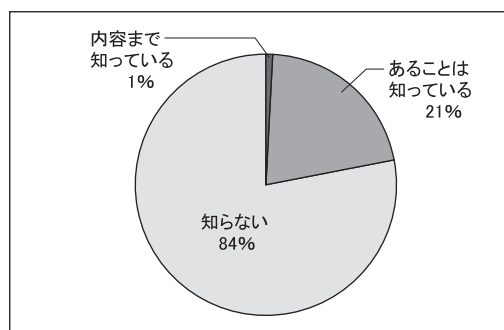


図 1 問 1 の回答
(スタンダードの認知度)

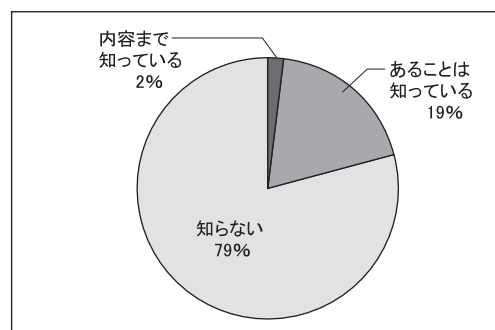


図 2 問 2 の回答
(到達基準の認知度)

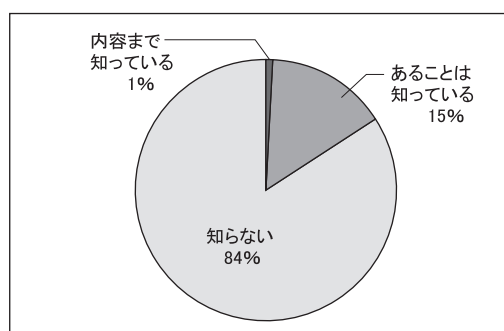


図 3 問 3 の回答
(水準コードの認知度)

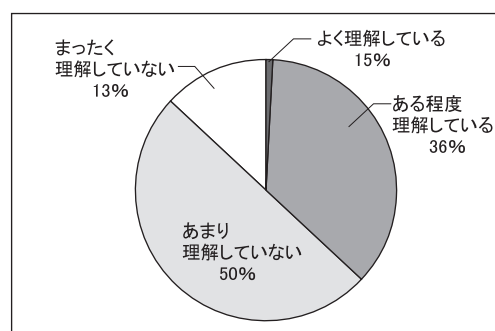


図 4 問 4 の回答
(各科目群の役割の認知度)

さらに問4では、「全学共通科目の各科目群（主題科目、学問基礎科目、大学入門ゼミ等）固有の役割について知っていますか」という問いを立て、「よく理解している」、「ある程度理解している」、「あまり理解していない」、「全く理解してない」という4択で回答を求めた。

問1のスタンダードの認知度について、「内容まで知っている」と「あることは知っている」を合わせた22%のスコアは、昨年度（26%）より悪くなっているが、調査回答数（819→1035）から考えると、悪化したというより、今年度の値がより正確に状況を表していると言えるだろう。問2の到達基準の認知度、問3の水準コードの認知度についても問1と同様のことが言える。

問4の各科目群の役割の認知度は、昨年度は「どちらとも言えない」と含む3件法で調査を行ったが4件法に修正して回答を求めた（昨年度は「どちらとも言えない」が52%であった）。この結果、「よく理解している」、「ある程度理解している」の肯定的回答が37%あることがわかった。また、「まったく理解していない」は13%であった。これら結果から断定的な結論は早計と考えるが、4件法により学生の状況を昨年度より正確に捉えることができたと考える。なお、「あまり理解できていない」が半数なので今後はこの状況を改善する必要があるだろう。

アンケート内容の固定化とアンケート回収率の安定化が前提であるが、これらの値の推移（良くなった、悪くなった）は来年度以降のアンケート結果を踏まえ、3～5年程度の調査スパンで検討するのが妥当であると思われる。

4-2. 相関図の認知度

続く問5～問7は、全学共通相関図の認知度に関する設問である。具体的には、問5で、相関図の認知度を問い（回答は、「知っており、参考にしている」、「知っているが、参考にしていない」、「知らない」の3件法）、これを踏まえて問6では、「知っている」を選択した回答者を対象に、「全学共通科目相関図をどのように知りましたか」という質問のもとで、相関図を知る手立てについて調べた。問7では、「学問基礎科目相互の関連を理解しているか」という質問に、「よく理解している」、「ある程度理解している」、「あまり理解していない」、「全く理解してない」の4択で回答を求めた。

相関図の認知度について、問5より、「知っており参考にしている」が17%であり、昨年度（23%）より減少している。一方、「知らない」は19%であり、昨年度（40%）に比較して顕著な改善と言えるだろう。また、「知っているが参考にしていない」が64%であり、入り口として相関図の認知は改善されたが、次のフェーズ（利活用）では課題があることを示している。

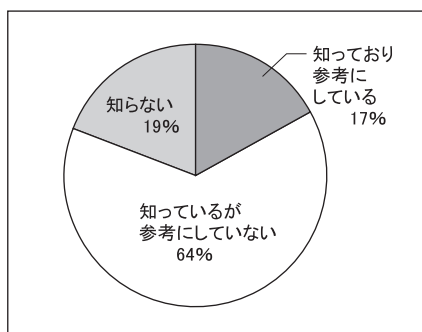


図5 問5の回答
(相関図の認知度)

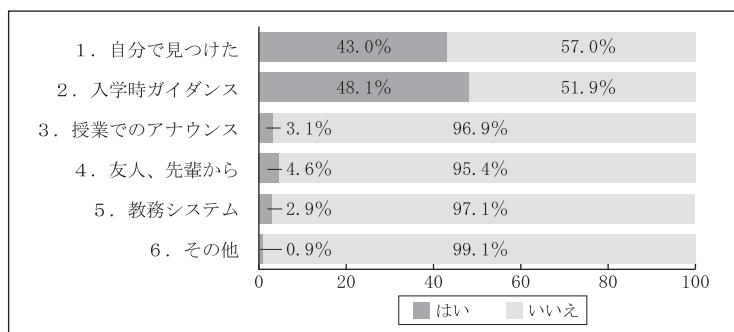


図6 問6の回答
(相関図を知る手だて)

問 6 より、回答者数の半数近くが入学時のガイダンスで相関図を知ったことがわかる。これは、今年度、入学時のガイダンスで相関図の説明に力点を置いた効果が現れていると考える。また、このような取り組みが図 5 の「知らない」を大きく軽減させたのではないだろうか。

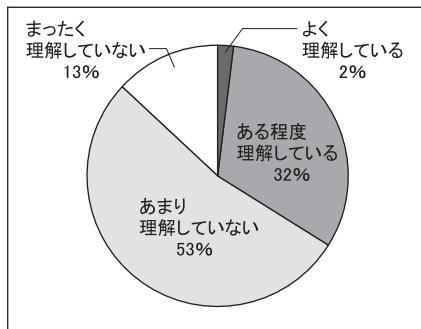


図 7 問 7 の回答
(学問基礎科目相互の関連の理解)

問 7 は、問 4 と同様、昨年度は「どちらとも言えない」と含む 3 件法で調査を行ったが 4 件法に修正して実施した (昨年度は「どちらとも言えない」が 55%であった)。この結果、「よく理解している」、「ある程度理解している」の肯定的回答が 34%あることがわかった。また、「まったく理解していない」は 13%であった。問 4 と同様、4 件法により学生の状況を昨年度より正確に捉えることができたと考える。また、「あまり理解できていない」が半数以上なので今後はこれを改善する必要がある。

なお、問 4 (各科目群の役割の認知度) と問 7 の回答分布がかなり似通っているが、「各科目群の役割の認知度」と「学問基礎科目相互の関連の理解」に関連があるかどうかは、今後、調査の俎上にあげるかどうかは検討の必要があると思われる。

また、表 2 が示す問 5 と問 7 のクロス集計の結果より、相関図を知っている学生ほど学問基礎科目相互の関連を理解しており、知らない学生は関連を理解していない傾向が読み取れる。昨年度のデータでも同様な結果が出ており、「相関図の認知度」と「学問基礎科目相互の関連についての理解」との関係性の強さが改めて裏付けられたといえる。

表 2 問 5 と問 7 のクロス集計 (「相関図の認知度」と「学問基礎科目相互の関連についての理解」の関係)

問 5. 全学共通科目相関図を知っていますか。	問 7. 学問基礎科目相互の関連を理解していますか				合計 (N)
	よく理解している	ある程度理解している	あまり理解していない	まったく理解していない	
知っており、参考に使っている	8.1%	67.1%	23.1%	1.7%	100.0 (173)
知っているが、参考にしていない	0.6%	29.8%	63.0%	6.6%	100.0 (665)
知らない	0.0%	10.4%	46.4%	43.2%	100.0 (192)

4-3. 履修計画を立てる際の判断基準

問 8～問 10 では、学生が履修計画を立てる際の判断材料が主題化されている。具体的にいうと、履修計画を立てる際に依拠する情報 (問 8)、履修計画を立てる際に読むシラバスの項目 (問 9)、授業を選択する際の決め手 (問 10) についての質問である。この 3 つの質問では、複数の回答も可とした。

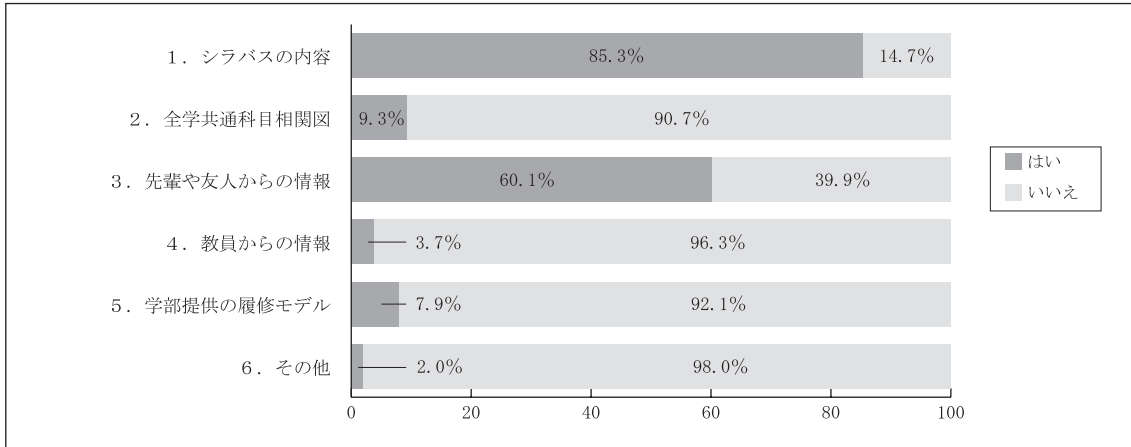


図8 問8の回答（履修計画を立てる際に依拠する情報）

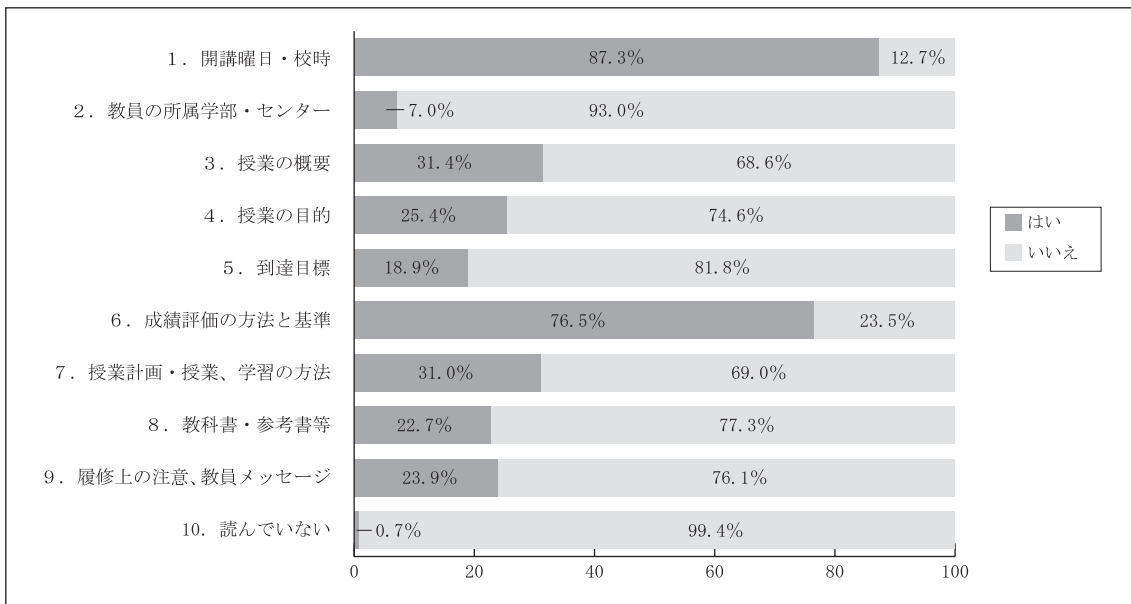


図9 問9の回答（履修計画を立てる際に読むシラバスの項目）

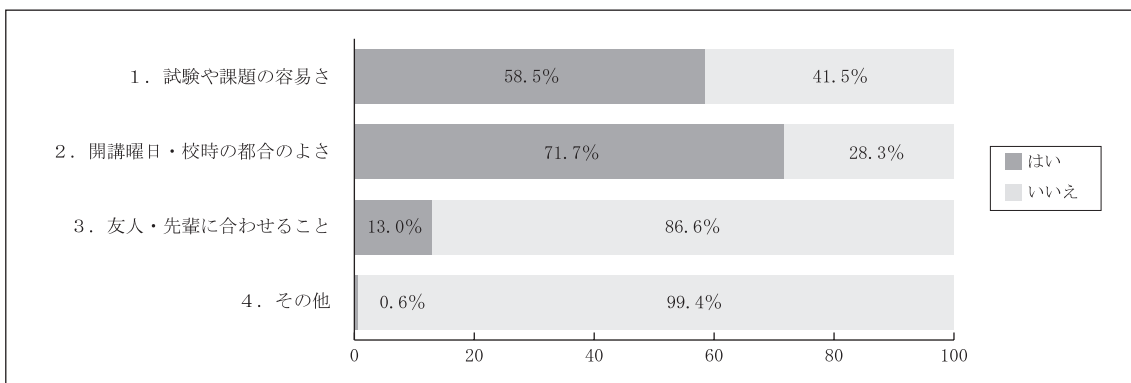


図10 問10の回答（授業を選ぶ際の決め手）

問 8 の履修計画を立てる際に依拠する情報については、概ね昨年度と同様な結果がでていいる。具体的に言うと、履修計画を立てる際にはシラバスが参照されているという結果が得られた。また、先輩や友人からの情報を上回っている。

問 9 の履修計画を立てる際に読むシラバスの項目について、最も注目されているのは開講曜日・校時であった。次に成績評価の方法と基準が重要視されている。これらは経験的に想像できる結果であるが、アンケート結果として明示的に現れたと考える。3 番目に授業の概要となっている。

問 10 の授業を選ぶ際の決め手について、昨年度同様な結果が得られた。最もスコアが高いのは「自分の興味関心との合致」である。これより、学生が単に試験や課題の容易さだけで授業を選択していないことがわかる（ただし、これも授業選択の重要な判断材料にはなっている）。また問 9 の結果とも関連するが、開講曜日・校時の都合のよさが授業選択の大きな決め手になっていることもわかる。例えば、「1 校時目・5 校時目の科目は忌避されがちだが、e-Learning 科目は逆に 1 校時目・5 校時目が望まれる」などの風聞があるが、このような点も時間割設計時に考慮する必要があるのかもしれない。

昨年度も指摘したが、文系・理系のバランスはほとんど考慮されていないということがわかる。カリキュラムの仕組みを変えて、強制的にバランスの良い履修をさせることも考えられるが、理系・文系のバランスの良い履修の必要性を新入生に的確に伝える、ということも、今後の課題の一つであるといえるだろう。

問 9、問 10 に関して学部間比較を行うと、学生の動向の違いが見て取れる。問 9 において、「成績評価の方法と基準」を選択した回答者は、全体では 76.5% であるが、教育学部生は 85.2% と比較的割合が高い。また、問 10 において、「試験や課題の容易さ」を選択している学生は、全体では 58.5% であるが、教育学部生は 70.5% と、こちらも比較的高いパーセンテージとなっている。この結果は、各学部の GPA 運用などに関わる可能性がある³⁾。今後、さらに踏み込んだ分析を行うことによって、各学部の制度が学生の履修行動に及ぼす影響について明らかにできるかもしれない。

4-4. 専門科目に対する全学共通科目の有用性、授業相互の関連づけ

問 11 では、「ある授業の学習内容について、別の授業の学習内容と関連付けて考えることがあるか」と問い、「よくある」、「ときどきある」、「ない」の三択で答えてもらった。問 11 は、それぞれの学生が、全学共通科目の授業において修得した知識を相互に関連付けることができるかどうか調べるための質問項目である。

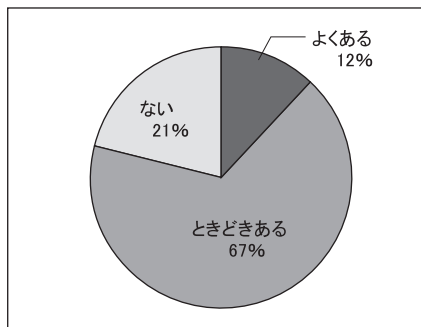


図 11 問 11 の回答
(授業相互の関連付け)

問 11 の授業相互の関連付けについて、これも昨年度とほぼ同様な結果となった。80% 程度の学生が授業相互の関連づけを行っていることがわかった。

表 3 が示すように、問 5 と問 11 のクロス集計の結果も昨年度と似通った結果となった。相関図を知っている学生は授業間の関連付けができていると言えるだろう。

表3 問5と問11のクロス集計（「相関図の認知度」と「授業相互の関連を意識すること」との関係）

問5. 全学共通科目相関図を知っていますか。	問11. ある授業の学習内容について、別の授業の学習内容と関連付けて考えることがありますか。			
	よくある	ときどきある	ない	合計 (N)
知っており、参考になっている	25.1%	63.5%	11.4%	100.0 (167)
知っているが、参考にしていない	9.5%	70.9%	19.7%	100.0 (645)
知らない	8.6%	55.1%	36.2%	100.0 (185)

5. 来年度のアンケートの改善点

今回の調査では、昨年度の実施を踏まえて、いくつかの点で改善を行った。しかし、今回の実施において、さらに改善を要する点がいくつか浮かび上がってきた。

まず、回答者における学部間バランスの問題がある。今回、アンケート調査の範囲を拡大することによって、このバランスを調整しようと試みたが、農学部生、医学部生が比較的少ないという問題は、やはり残っている。来年度の実施において、学部間バランスをどのように確保するかについては、さらに検討が必要であろう。

次に、設問に関する課題がある。問5（相関図の認知度）の回答として「知っているが参考にしていない」が64%になっているが、「知っているが相関図がよくわからない」等と考えている学生もこの回答をしたのではないかと考えられる。問5は相関図を検討するための重要な質問項目であり、回答候補の精査が必要と考える。そのほかの点では、今年度のアンケートの枠組みをそのまま利用することができると思われる。

最後に、回答者への配慮に関する課題がある。今回のアンケートでは、後半の設問になると、有効回答率がさがっているが、この原因として、裏面があることに気づけなかった、あるいは裏面をあえて答えなかった学生が相当数いるということが考えられる。来年度は、アンケート用紙表面の最後に、「裏面に続く」とか書いておいたほうが良いだろう。

6. おわりに

今回の調査で重視していた相関図の認知度については、ガイダンスや履修相談などの機会における説明努力によって、許容レベルまでには高まったことが確認されたが、設問方法の改善により、相関図の利活用について実は大きな課題があることが浮き彫りになった。同時に、香川大学スタンダードの認知度が低い水準にとどまっていることの問題性が明らかとなった。

香川大学共通教育では、香川大学共通教育の理念と目標を明らかにした「香川大学共通教育スタンダード及び教育目標」の理解を徹底させることを今後の課題として挙げている。この課題について、相関図の観点から言えることは次のことである。学問基礎科目の相関図（主題科目との関連を含む。）は、上記スタンダードに基づいて作成された共通教育カリキュラムに載っている学問基礎科目と主題科目の授業について、その相互の関連性を図示したものであるが、この関連性を意識させるためには、

何よりもこのカリキュラムの作成者の意図を、授業を提供する教員と授業を受ける学生に対して、簡潔に整理した文章の形で示すことが必要である。特に、各授業科目群の役割の認知度と学問基礎科目相互の関連の認知度がいずれも 35%程度に止まっていることが明らかとなっているので、当面、『全学共通科目修学案内』（「必ずこれだけは知っておこう」）の内容のポイントを理解させるための手立てを取る必要がある。

注

- 1) 全学共通科目相関図の詳細については、中谷ほか（2013）を参照。
- 2) 昨年度のアンケート結果については、斉藤ほか（2014）を参照。
- 3) 各学部のGPA制度運用については、佐藤ほか（2010）を参照。

参考文献

中谷博幸ほか（2013）「学問基礎科目の充実と共通教育コーディネーターの役割」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第 10 号、63-76 頁。

斉藤和也ほか（2014）「学問基礎科目相関図の効果検証」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第 11 号、19-25 頁。

佐藤慶太ほか（2010）「全学共通科目における成績評価の現状と課題」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第 7 号、33-48 頁。